

堀杏庵年譜稿

論文要旨

近世初期、藤原惺窩に学んだ儒学者たちが漢学の世界を領導した。なかでも林羅山はひとときわびきん出た存在だったと言えるが、羅山のみが屹立していたわけではない。堀杏庵（一五八五～一六四二）も、尾張徳川家という権威と結び付き、医の要素を大きく有した点が独自で、かつ羅山ともよく連携し、この時代の漢学界を盛り立てるのに大きく貢献した。それらの点によつて、杏庵にも高い評価が与えられるべきであろう。本稿では、そのような問題意識に基づき、Ⅰ仕官以前（天正十三年～慶長十六年）、Ⅱ浅野家への仕官（慶長十六年～元和八年）、Ⅲ尾張徳川家への仕官（元和八年～寛永十九年）という三期に分けて、杏庵の人生を年譜形式によつて概括する。特に、若い時期の医師としての修業過程や、羅山との親交、第Ⅲ期、尾張徳川家に仕官した、四十歳前後からの儒学者としての名声の高まりなどが注目に値しよう。

キーワード 【近世初期、儒学者、堀杏庵、林羅山、尾張徳川家】

近世初期、藤原惺窩に学んだ儒学者たちが漢学の世界を領導した。

鈴木健一

なかでも林羅山は、幕府に仕え権力に最も近かったこと、漢籍から得られる多くの情報を総合的に摂取し、合理性をもつて把握し、かつ広く啓蒙したこと、によつて、ひとときわびきん出た存在だったと言える。しかし、羅山のみが屹立していたわけではない。堀杏庵（一五八五～一六四二）も、尾張徳川家という権威と結び付き、医の要素を大きく有した点が独自で、かつ羅山ともよく連携し、この時代の漢学界を盛り立てるのに大きく貢献した。それらの点によつて、杏庵にも高い評価が与えられるべきであろう。本稿では、そのような問題意識に基づき、杏庵の人生を年譜形式によつて概括する。それに先立つて、四つの点について触れておく。

第一に、その人生は三期に分けて捉えられるという点である。具体的には、Ⅰ仕官以前（天正十三年～慶長十六年）、Ⅱ浅野家への仕官（慶長十六年～元和八年）、Ⅲ尾張徳川家への仕官（元和八年～寛永十九年）である。特に、第Ⅲ期、尾張徳川家に仕官した、四

十歳前後から儒学者としての名声が高まり、貴紳との交わりも増えてきたことが注目に値する。このことは、年齢的にも実績が積み重なってきたこと、尾張徳川家に仕えたため権威も加わり、実質的に交流範囲が広がったことに起因しているよう。『堀頭貞先生年譜稿本』にも、元和九年条に「先生儒医を以て天下に鳴る。笈を負ひ、学びに来る者甚だ多し」、寛永元年条に「京師に至り陽明殿信尋公先生に請ひて大学公素信仏説を講ず。(中略) 搢紳学生来り、聴講する者甚だ多し」、寛永三年条に「先生、松平下野守・浅野但馬守を三本木の第に招き、之を饗す。他の侯伯来訪者甚だ多し」などである。第二に、羅山とは生涯親しく交わり、関わりが深かった点である。具体的には、寛永九年、羅山が先聖殿を建設した際、徳川義直の寄進を受けているのだが、杏庵もそれを支援したこと、『寛永諸家系図伝』の編集とともに携わったこと、またしばしば歳旦詩を唱和していることなどが挙げられる。

羅山との比較から杏庵のありかたをもう少し見てみたい。林読耕斎「羅山林先生行状」には、

幕下の士、阿部正之、一日邂逅、杏庵正意に語りて曰く、「聞く、今時の博物者は羅山子にして、其の之に次ぐ者は足下なりと。吁、得難きの才なり」と。正意答へて曰く、「羅山は則ち誠に然り。彼の文学を以て、方今の日域に生まれて、展布を得ざるや、甚だ惜しむべし。吾儕十余輩、之を累ぬと雖も、而も豈に一羅山を望まんや。侔しく之を称すべき所以に匪ず」と。

正之曰く、「予は固より不学にして弁知する所無し。今、告ぐる所を聞き、弥々羅山の跋及すべからざるを知るなり。足下の直説、不夸不耀、最も感讀すべきなり」。

として、学識は羅山に次ぐとの認識が記されている。また、荻生徂徠『徂徠集』〈元文五年刊〉巻二十七「屈景山に答ふ」(『先哲叢談』にも抄出)には、

余不佞、髫年の時、之を先大夫に聞けり。昔、洛に惺窩先生なる者有り。其の高第の弟子、羅山・活所諸公の若き者五人、名海内に聞こえ、皆務めて弁博を以て相高くす。而るに屈先生なる者は、独り温厚の長者と為りて、乃ち四人の間に詘然とし、退讓して自ら將ひ、名高きを求めず。其の東都に来るや、先大夫も亦嘗て一二接見すと云ふ。夫れ儒者断断たるは古より然りと為す。而るに乃ち能く爾る者、千百人中一人のみ。

とあるように、性格が温厚で謙遜の心が強く、名声を求めなかったという。

第三に、医師としての特質が大きい点である。杏庵は、中国における金・元の医学革新の成果―李東垣・朱丹溪の医説・いわゆる李朱医説―を渡明して学んだ田代三喜に從学した曲直瀬一溪(初世道三)を祖とする曲直瀬流の医学を学んでいる。そのことは、同じく曲直瀬家に学んだ父徳印の意向に沿ったものであろう。

杏庵は曲直瀬家に学んだ後、惺窩門に入っている。そういう点でも、医は本業だったと言える。ちなみに、慶長十年(二十一歳)の

『堀頤貞先生年譜稿本』の記述に、堀家にはもともと書物は乏しかったが、機会を得ることに書写していくうちに、その数も増し、儒医と見なされるようになっていった、とある。

ちなみに、羅山は、

足下の稟賦、天、意有るか。技芸に溺ること勿れ。孫真人医を以て名を貶さず、趙松雪書を以て名を損せず。足下以て如何と為す。孔子曰く、芸に遊ぶと。溺するの謂ひに非ず。足下の衛生に於ける、亦た宜しく然るべし。余が言、狂に非ず。足下之を三復せよ。若し言はんと欲する所有らば、則ち必ず余に告げよ。幸ひ為らん。足下に益無ければ、必ず我に益有らん。」

（『羅山文集』巻五「堀正意に示す」）

として、杏庵が医学に傾斜することを諫めたこともあった。

第四に、漢文に対して高い評価があった点である。当時、詩は丈山、文は杏庵という認識があった。寛永十三年来日の朝鮮通信使權弐が石川丈山に語ったことばとして、

正意は見ゆることを得ずと雖も書を以て問答す。真に博雅の士也。不佞、願はくは尊公を以て貴邦詩家の正宗と為し、正意を以て文苑の老将と為す。（『新編覆醬集』巻十六「朝鮮国権学士菊軒に与ふる筆語」）

が残されている。

〔付記〕引用した漢文は、すべて訓読したものである。

〔凡例〕

以下の略称を用いる。

・年譜……堀頤貞先生年譜稿本（東京大学史料編纂所蔵本。明治三十八年に堀鉞之丞氏所蔵本を謄写したもの）

・羅山詩集、羅山文集……羅山林先生詩文集

〔一仕官以前（天正十三年～慶長十六年）〕

天正十三年（一五八五）乙酉 一歳

◎五月二十八日、近江国安土に、医師堀徳印（一五三四～一六一〇。号、月江）の長男として生まれる。（年譜）

父徳印は、曲直瀬一溪（初世道三）に医を学んだ。祖父定澄は、近江野洲郡の野村城主。曲直瀬一溪は、戦国時代の名医。京都に医学院啓迪院を設立した。

天正十八年（一五九〇）庚寅 六歳

◎この年、弟安之、近江八幡山に誕生する。（年譜）

天正十九年（一五九一）辛卯 七歳

◎この年、父とともに上洛する。（年譜）

文禄元年（一五九二）壬辰 八歳

◎この年、「就学」。（年譜）

文禄三年（一五九四）甲午 十歳

◎この年、南禅寺帰雲院の梅心正悟の室に住し、書を読み、字を学ぶ。（年譜）

慶長二年（一五九七）丁酉 十三歳

○この年、『中庸章句』を臨写する。（年譜）

慶長三年（一五九八）戊戌 十四歳

○この年、『雲陣夜話』『翠竹医方』を写す。（年譜）

『雲陣夜話』は、曲直瀬一溪著の医学書。

○この年、享徳院正淳に医学を学ぶ。（年譜）

享徳院正淳とは、曲直瀬正純（号は享徳院。一溪の子を妻とした）のことであろう。ただし、『年譜』では、正淳と正純は別人という扱いになっている。慶長六年の項、参照。

慶長五年（一六〇〇）庚子 十六歳

○この年、「帰雲洞」に入り、『類萃録』十余巻を写す。（年譜）

慶長六年（一六〇二）辛丑 十七歳

○二月、正淳が『老師雑話記』を、三月、法斎が『医方大成』を、四月、曲直瀬正純が『難経』を、同月、正淳・宗由が『難経』を、五月、曲直瀬玄朔が『大成論』を、八月、道節が『運氣論』を、十月、妙雲院が『中庸』を、十一月、曲直瀬正琳が『正伝或問』を、十二月、玄朔が『局方發揮』を、それぞれ講義したのを聴き、「鈔解若干巻」を作成する。（年譜）

曲直瀬玄朔は、一溪の甥で、養子となり、二世道三となる。曲直瀬正琳は、玄朔の子を妻とし、曲直瀬家の分家である養安院家の祖となる。

『老師雑話記』は、曲直瀬一溪著の医学書。『医方大成論』は、

室町時代末に吉田宗桂が明の熊宗立著『医書大全』を抜粋して作成した書。『難経』は、後漢二世紀頃の医学書。秦越人（扁鵲）著。『運氣論』は、『素問入式運氣論奥』。宋の劉温舒著の医学書。

『局方發揮』は、元の朱丹溪が著した医学書。

慶長七年（一六〇二）壬寅 十八歳

○この年、剃髪して、正意と号する。（年譜）

○正月、正琳が『運氣論』を、二月、妙運院が『論語』『大学』を、四月、曲直瀬玄朔が『格致余論』を、五月、宗由が『正伝或問』を、九月、正純が『医学指南』を、十月、玄朔が『医学正伝』を、十一月、宗由が『局方發揮』を、それぞれ講義したのを聴き、「鈔解若干巻」を作成する。（年譜）

『格致余論』は、元の朱丹溪が著した医学書。『医学指南』は、曲直瀬一溪著の医学書。『医学正伝』は、明の虞搏が著した医学書。

慶長八年（一六〇三）癸卯 十九歳

○冬、伏見において、蜀山・松山らと交流する。（年譜）

○この年から、『葉剤日記』を付け始める。（年譜）

○この年、寿海院が『本草序例』を、妙合院が『古文孝経』を、それぞれ講義したのを聴き、「鈔解若干巻」を作成する。（年譜）

慶長九年（一六〇四）甲辰 二十歳

○正月、正淳が『明医雑書』を、四月、妙雲院が『三略』『六韜』を、五月、宗由が『脉訣』を、七月、曲直瀬玄鑑が『医学心伝』を、

十月、宗珣が『運氣論』を、それぞれ講義したのを聴き、「鈔解若干卷」を作成する。(年譜)

曲直瀬玄鑑は、玄朔男。三世道三。宗珣は、吉田宗恂。家康に仕えた医師。惺窩門。

『明医雑書』は、『明医雑著』。明の王綸が著した医学書。

○この年、茅原田貞正女を娶る。(年譜)

○この年、銅駝坊から、三本木(東洞院通竹屋町上ル)に移居する。(年譜)

慶長十年(一六〇五)乙巳 二十一歳

○この年、四書や『詩経』『易経』『礼記』の「鈔解若干卷」を作成する。(年譜)

○堀家にはもともと書物は乏しかったが、機会を得ることに書写していくうちに、その数も増し、儒医と見なされるようになっていった。(年譜)

慶長十一年(一六〇六)丙午 二十二歳

○この年、初めて、藤原惺窩に朱子学を学ぶ。(年譜)

○この年、紀伊に赴く。(年譜、杏陰集・卷二)

慶長十二年(一六〇七)丁未 二十三歳

○三月、宗由が『格知余論』『素問』を講義したのを聴き、『素問弁髦』を著す。(年譜)

『素問』は、最古の医書。黄帝と、その臣で名医の岐伯との問答形式。

○十月、菅玄東(得庵)母没。追悼詩あり。(杏陰集・卷二、七)菅得庵は、曲直瀬一溪に医を学び、羅山・惺窩に儒を学ぶ。

○この年、蜀山・玄東(菅得庵)・紹安・三清らが訪れて、『通鑑綱目』の文法に擬して『太平記』二巻を訳す。(年譜)

慶長十三年(一六〇八)戊申 二十四歳

○春、杏庵の招きにより、林羅山が詩会に出席する。(羅山詩集・卷五十三)

○六月二十六日、長女誕生。後に安芸藩医黒川寿閑の妻となる。(年譜)

○この年、『啓迪集題辭解』を著す。(年譜、杏陰集・卷十一)

『啓迪集』は、曲直瀬一溪著の医学書。

慶長十四年(一六〇九)己酉 二十五歳

○この年、今出川宣季が『職原抄』を講義するのを聴き、『職原抄解』を著す。(年譜)

○この年、那波活所(信吉)の詩に唱和する。(杏陰集・卷一)

那波活所は、惺窩門の儒学者。詩文集『活所遺稿』。

慶長十五年(一六一〇)庚戌 二十六歳

○七月十七日、父徳印没、七十七歳。(年譜)

○九月、長男正英(号、立庵。一六一〇〜六二)誕生。(年譜)

○冬、倉満泰次に代わって、「安南国大監に贈る」を作成する。(年譜、杏陰集・卷十)

【Ⅱ浅野家への仕官（慶長十六年～元和八年）】

慶長十六年（一六一二）辛亥 二十七歳

◎和歌山藩主浅野幸長が杏庵の名声を聞き、すでに幸長に仕えていた惺窩に請うて招き、仕えることになる。五百石を領する。（年譜）

浅野幸長は、浅野長政の長男。文禄・慶長の役に従軍したが、関ヶ原の合戦では東軍の先鋒として岐阜城を攻撃した。

慶長十七年（一六一二）壬子 二十八歳

○七月、父徳印の大祥忌のため、梅心正悟が法会を行い、杏庵の孝心を賞して詩を詠じ、杏庵もそれに和す。翌日、藤原惺窩もまた和す。（年譜、杏陰集・巻一）

○十月十三日、相国寺鹿苑院の听叔顯暉を羅山とともに訪問する。

（鹿苑日録）

○十月、林羅山・玄東（菅得庵）・道門・善秀らとともに高雄山に遊び、羅山と駿府に赴く。（年譜、杏陰集・巻二、羅山詩集・巻三十五）

○十月、林羅山が杏庵席にて詩を詠む。（羅山詩集・巻六十一・六十二）

慶長十八年（一六一三）癸丑 二十九歳

○春、駿府より帰る。（年譜）

○二月、法橋に叙せられる。（年譜）

○八月二十五日、浅野幸長没。三十八歳。その後、幸長の弟の長晟に仕える。（年譜）

浅野長晟は、大坂の役で塙団右衛門直之らを討ち取り、武功をあげた。

慶長十九年（一六二四）甲寅 三十歳

○四月、駿府に赴く。徳川家康の命により、「為政論」を著す。（年譜、杏陰集・巻八）

○十月、次女誕生。後に、三宅正堅（澹庵）の妻となる。（年譜）

三宅澹庵は、杏庵門。常陸下妻藩主松平定綱に仕える。

○冬、大坂の役に従軍する。（年譜）

慶長年間

○冬、林羅山・菅玄東（得庵）・永田正明（善斎）・那波信吉（活所）らとともに秋江の房に赴く。詩あり。（杏陰集・巻三、羅山詩集・巻三十六）

永田善斎は、惺窩・羅山に学び、のち羅山の推挙によって、紀伊和歌山藩儒となる。

元和元年（一六一五）乙卯 三十一歳

○九月、有馬温泉に浴す。詩あり。（年譜、杏陰集・巻三）

○九月二十日、京都に雨雪降り、翌日九月の雪について藤原惺窩と語り、またそれに関連して詩の贈答あり。（年譜、杏陰集・巻二）

○十一月、浅野長晟に従って、江戸に赴く。（年譜、杏陰集・巻二）

元和二年（一六一六）丙辰 三十二歳

○春、駿府に赴く。（年譜）

○三月二十五日、三女誕生。後に福井是庵の妻となる。（年譜）

○十二月十一日、林羅山が杏庵席にて詩を詠む。(羅山詩集・卷三十)

元和三年(一六二七)丁巳 三十三歳

○正月、林羅山が杏庵の歳旦詩に唱和する。(羅山詩集・卷十五)

○二月十三日、林羅山が杏庵に書翰を送る。(羅山詩集・卷七)

○十一月十九日、林羅山が杏庵第にて詩を詠む。(羅山詩集・卷五十)

○この年、紀伊にあり、十方院松雲(永原松雲)の為に四書及び『史記』を講義し、松雲から『源氏物語』の講義を受ける。(年譜)

○この頃、石川丈山との交遊が始まるか。(東溪石先生年譜)

石川丈山は、漢詩人。家康に仕えたが、大坂夏の陣のち難髪し、惺窩に学ぶ。元和九年、安芸広島藩に仕えたが、寛永十三年に致仕した。詩文集『覆醬集』『新編覆醬集』。

元和四年(一六二八)戊午 三十四歳

○正月、藤原惺窩が杏庵の歳旦詩に唱和する。(惺窩先生文集・卷五)

○六月、江戸に赴く。林羅山が杏庵の紀行中の詩に唱和して、三宅正堅(澹庵)に示す。(年譜、羅山詩集・卷四十四)

○十月二十七日、四女誕生。後に仙庵の妻となる。(年譜)

元和五年(一六二九)己未 三十五歳

○二月一日、林羅山が杏庵亭にて詩を詠む。(羅山詩集・卷六十)

○七月十八日、浅野長晟が安芸広島藩主に移封され、従う。(年譜)

林羅山が安芸に赴く杏庵に対して詩を贈る。(年譜、羅山詩集・卷三十七)

◎九月十二日、藤原惺窩没。五十九歳。追悼詩あり。(年譜、杏陰集・卷二、惺窩文集・続卷三)

○九月、『兵占時日』序を著す。(年譜、杏陰集・卷七)

○十月十四日、林羅山が杏庵に書翰を送る。(羅山文集・卷五。「問者之日」で始まるもの。『羅山残稿』卷十二により、月日を特定できる)

元和六年(一六二〇)庚申 三十六歳

○秋、浅野長晟に従って、江戸に赴く。(年譜)

元和七年(一六二二)辛酉 三十七歳

○正月、林羅山が杏庵の歳旦詩に唱和する。(羅山詩集・卷十五)

『川尾張徳川家への仕官(元和八年〜寛永十九年)』

元和八年(一六二三)壬戌 三十八歳

○正月、林羅山が杏庵の歳旦詩に唱和する。(羅山詩集・卷十五)

○七月十七日、父徳印の十三回忌。詩あり。(杏陰集・卷三)

○十一月二十三日、専益宅における和漢聯句の会に参加する。(大阪天満宮他蔵本)、『連歌総目録』

連衆は他に、昌琢・林永喜・林羅山・昌侃・竹中重門・玄陳・大圭紹琢・宗之・専益・遠藤宗務ら。

林永喜は、羅山弟、東舟、信澄。竹中重門は、武将。竹中半兵

衛重治の男。秀吉に仕え、のち徳川氏に仕えた。

○十二月七日、竹中重門邸における漢和聯句の会に参加する。(大阪天満宮他蔵本)『連歌総目録』

連衆は他に、林羅山・昌琢・林永喜・大圭紹琢・昌俣・玄陳・宗之・専益・遠藤宗務ら。

◎この年、浅野長晟に従って、江戸にあり。尾張藩主徳川義直が杏庵の名声を聞き、長晟に請うて召し、義直に仕えることになる。この後、義直に常に従い、秀忠・家光にも拝謁し、幾度も「酒饌」「時服」を賜る。(年譜)

元和九年(一六二三) 癸亥 三十九歳

○正月、林羅山が杏庵の歳旦詩に唱和する。(羅山詩集・卷十五)

○三月、漢和聯句の会に参加する。(国会図書館蔵『連歌合集』十九冊)『連歌総目録』

連衆は他に、林永喜・応昌・敦通・林羅山・大圭紹琢・竹中重門・専益(専益)・外由・石川丈山・了景ら。

○秋頃、木下長嘯子が那波道円(活所)に与えた和歌に唱和する。(杏陰集・卷三、活所遺稿・卷三)

木下長嘯子は歌人。秀吉の室北政所の甥。若狭小浜城主。関ヶ原の合戦の後、隠棲。家集『拳白集』。

◎儒医としての名声が高くなり、多くの者が学びにやって来るようになる。(年譜)

寛永元年(一六二四) 甲子 四十歳

○五月二十九日、次男貞高(一六二四〇九五。号、忘斎。名古屋藩士)誕生。(年譜)

○七月、義直の命により、熱田神宮に赴き、「官符」を写し、「宝器」を檢し、大宮司や社僧と「祀典」について議定した。(年譜)

野村辰美「尾張藩主徳川義直と熱田宮」(『近世名古屋享元絵巻の世界』清文堂出版、二〇〇七年)参照。

◎冬、京都に到り、十月七日から十一月十四日まで、近衛信尋の求めにより、『大学』公素信仏説を講義した。来聴する者多数。(年譜)

近衛信尋は、後陽成天皇第四皇子、後水尾天皇の同母弟。

○十一月、江戸に赴く。(年譜)

○この年、『大学鈔解』を著し、長男正英に授ける。(年譜)

寛永二年(一六二五) 乙丑 四十一歳

○正月、林羅山が杏庵の歳旦詩に唱和する。(羅山詩集・卷十五)

○春、江戸より帰る。(年譜)

○十月、職人に命じて、『扶桑略記』『百鍊抄』を写させ、朱点を加える。(年譜)

○十二月、「犬山侯成瀬氏墓誌銘」を著す。(年譜、杏陰集・卷十五)

「犬山侯成瀬氏」は、尾張犬山藩主成瀬正成。この年正月に没した。

寛永三年（一六二六）丙寅 四十二歳

◎三月六日、法眼に叙せられる。（年譜）

◎秋、將軍家光が京都を訪れた際、松平下野守（利正）・浅野但馬守（長晟）を三本木の邸宅に招き、饗応する。他にも来訪者はなはだ多し。（年譜）

寛永四年（一六二七）丁卯 四十三歳

○正月、菅玄同（得庵）の求めに応じて、『惺窩文集』に序を著す。（年譜、杏陰集・卷七）

○二月、義直に従い、江戸に赴く。紀行文成立。（年譜、国会図書館蔵『杏庵紀行』）

○四月二十五日、夢想和漢聯句の会に参加する。（大坂天満宮蔵本他）（『連歌総目録』）

連衆は他に、徳川義直・以心崇伝・玄仲・応昌・佐河田昌俊・林羅山・玄竹・玄益・林永喜・聴意・玄高。

以心崇伝は、臨済宗の僧侶。南禅寺住持となり、塔頭金地院に住む。家康の信任厚く、幕府の為に尽力した。佐河田昌俊は、歌人・茶人。飛鳥井雅庸・近衛信尋に歌を、小堀遠州に茶を学ぶ。

○五月、吉田玄猶に代わって、『射芸印可文』を著す。（年譜、杏陰集・卷十二）

○六月二十五日、漢和聯句の会に参加する。（大坂天満宮蔵本）（『連歌総目録』）

連衆は他に、以心崇伝・玄仲・脇坂安元・林羅山・鳳栖元竹・

林永喜・応昌・佐河田昌俊・那波活所・宗貞・吉真・元吉。

脇坂安元は、信濃飯田藩主。号、八雲軒。羅山に儒を学ぶ。家集『八雲藻』。

○九月、義直に従って、有馬温泉に赴く。余田正興と交流する。『温泉記』を著す。帰京。（年譜、杏陰集・卷七・九）

○この年、木下長嘯子を東山に訪問し、女子を唄った長嘯子の歌に唱和する。（年譜、杏陰集・卷三、七）

長嘯子の娘三が亡くなったのは同年三月十五日。「木下長嘯子年譜」は杏庵の唱和を寛永五年九月のこととする。

寛永五年（一六二八）戊辰 四十四歳

○七月、門人の正允の求めによって、「倉公・扁鵲授受図」の画賛詩を詠じる。（年譜、杏陰集・卷十三）

倉公・扁鵲は、漢代の名医。

寛永六年（一六二九）己巳 四十五歳

○四月刊の『本朝文粹』に、杏庵序あり。（国会図書館蔵版本、杏陰集・卷七）

『年譜』には、十一月に吉田（角倉）素庵の求めによって、校訂し朱点を付すとある。角倉素庵は、豪商。惺窩門。羅山を惺窩に引き合わせた。本阿弥光悦らの嵯峨本出版に助力した。

○七月、駒福（堺町通丸太町上ル）に移居する。（年譜）

○八月、久須見常林の求めに応じて、『悟真寺鐘銘』を著す。（年譜、杏陰集・卷十四）

○十月、長谷川広貞の求めに応じて、「長谷川藤広墓誌銘」を著す。
(年譜、杏陰集・巻十五)

長谷川藤広は、長崎奉行。家康の側近。妹が家康の側室となつた。

○十二月、「正法寺願文」を著す。(年譜)

○この年、義直が兵主大神宮を建て、八王子素戔鳴社を修理したいと考え、義直の命により、祝詞を著す。(年譜、杏陰集・巻十八)

寛永七年(一六三〇)庚午 四十六歳

○二月、義直に従って、伊勢神宮を参詣する。義直が祠官に命じて、神庫を開けさせ、神道三部書・神祇書数十部を得、珍書数十部を模写させた。杏庵も『宝基本紀』『神祇本源』などの書を自ら書写した。(年譜)

『宝基本紀』は、『造伊勢二所太神宮宝基本記』。伊勢神道の経典。永仁四年までに成立。

『神祇本源』は、『類聚神祇本源』。度会家行著。元応二年成立。伊勢神道を体系化した。

○二月、義直に従って、久々里に遊獵し、愚溪寺に遊び、詩を詠じる。(年譜、杏陰集・巻四・七)

○九月十二日、明正天皇即位。義直の命により上洛し、踐祚・讓位の儀式を見て、『寛永御即位記』を作る。(年譜)

明正天皇は、後水尾天皇の第二皇女。母は、徳川秀忠娘和子。

○十二月、義直に従って、江戸に赴き、『東行日録』を著す。(年譜、

国会図書館蔵『杏庵紀行』)

寛永八年(一六三二)辛未 四十七歳

○六月、江戸より尾張へ帰る。紀行文『辛未手録』あり。(年譜、杏陰集・巻十九)

○六月、名古屋藩士横井時安著『養隼方』の序を著す。(年譜、杏陰集・巻七)

○九月十八日、三男道隣(孤山。名古屋藩儒。一六三二〜九五)誕生。(年譜)

○十一月、京都の書肆杉田玄与が『春秋左氏伝』を刊行したいと考え、その求めによって本文を校訂し、跋文も著す。(年譜、杏陰集・巻十一)

国立公文書館内閣文庫蔵『春秋経伝集解』がそれに該当する。

全巻にわたって付訓を施したのは初めてのことだった。上野賢知「堀杏庵訓点の春秋左氏伝について」(『春秋左氏伝雑考』東洋文化研究所紀要、一九五九年三月)参照。

○この年、京都に赴き、安芸の石田一定介・石川左親衛の求めに応じて、『石庵墓誌銘』を著す。(年譜、杏陰集・巻十五)

寛永九年(一六三三)壬申 四十八歳

○この年、江戸にあり。(年譜)

○正月、歳旦詩あり。(杏陰集・巻五、八雲藻)

○正月、脇坂安元の元旦の歌に唱和する。(八雲藻)

○四月十三日、徳川家光が日光東照宮に参詣して江戸を出発した。

しかし、家光は同年正月に秀忠が死去したことにより喪に服していたため詣でず、今市に滞在していた。その際、義直も今市におり、その命により、日光に赴いて祭礼を見、記を作り、進献する。(年譜)

『士林沂洄』には、「將軍家服仮有り、神廟に詣でず、今市に次る」とある。

○八月十五日、林羅山が杏庵の詩に唱和する。(羅山詩集・卷二十四)

※九月三日、浅野長晟没。四十七歳。

○九月十三日、義直、月見の宴にて歌を詠じ、それに唱和する。

(杏陰集・卷四)

○十月、義直著『文林宝帖』の跋を著す。(年譜、杏陰集・卷十二)

○十一月、美濃大垣城主岡部長盛没。哀悼の詩を詠む。(年譜、杏陰集・卷七)

○冬、徳川義直の寄進により、林羅山が上野忍岡の賜地に先聖殿を建設する。(羅山林先生年譜、徳川実紀)

羅山が枳奠に用いるために「歴世大儒像」を制作しようとした際、杏庵も相談に乗り、最初は松華堂昭乗に依頼した。しかし、昭乗が老齢を理由に辞退し、代わりに狩野山雪を推薦してきた。図像の選定についても杏庵が羅山とともに指示を出した(林鷲峰「狩野永納家伝画軸序」『鷲峰文集』卷八十六)。杉原たく哉「狩野山雪筆歴世大儒像について」(美術史研究、一九九三年十二月)

参照。

寛永十年(一六三三) 癸酉 四十九歳

○この年、江戸にあり。(年譜)

○正月、歳旦詩あり。(杏陰集・卷四、八雲藻)

○正月、林羅山が杏庵の歳旦詩に唱和する。(羅山詩集・卷十五)

○正月、脇坂安元の元旦の歌に唱和する。(杏陰集・卷四、八雲藻)

○二月二日、母(宇野氏)没。(年譜)

追悼詩あり(杏陰集・卷五)。これに石川丈山が唱和し、さらに序を付して送る(新編覆醬集・卷一)。

○二月十三日、義直が梅花を詠じた詩に唱和する。(杏陰集・卷四)

○二月、林羅山が江戸において枳菜を行ったのに関与した。『枳奠儀』を著す。(年譜)

○四月、「吉田子元(角倉素庵)行状」を著す。(年譜、杏陰集・卷十七)

○この年、京都にあつて、『書経』『職原鈔』を講義する。(年譜) 寛永十一年(一六三四) 甲戌 五十歳

○春、京都にあり。(年譜)

○正月、歳旦詩あり。(杏陰集・卷四、八雲藻)

○正月、脇坂安元の元旦の歌に唱和する。(杏陰集・卷三、八雲藻)

○正月、林羅山が杏庵の歳旦詩に唱和する。(羅山詩集・卷十五)

○六月、家光が上京する。(年譜)

○閏七月四日、上洛した徳川義直・頼宣・頼房らを私邸にて饗応す

る。(年譜)

○八月十五日、歌一首詠。安楽庵策伝の歌に唱和する詩一首も詠。

(策伝和尚送答控)

○九月四日、杏庵宅で詩歌会が催され、林羅山・安楽庵策伝・木下長嘯子・松永貞徳・那波道円(活所)・打它公軌・三宅正堅(澹庵)・蜀山らが出席する。長嘯子が出題した。(年譜、杏陰集卷五、羅山詩集・卷二十七、五十四、五十五、拳白集・一〇八四・一〇九九・一一二一番、策伝和尚送答控、活所遺稿・卷四、逍遊集・一六六番)

安楽庵策伝は、僧侶。話芸に秀でた。笑話集『醒睡笑』。打它公軌は、歌人。長嘯子、貞徳、中院通勝に学ぶ。

○九月五日、那波活所とともに東山に木下長嘯子を訪ねる。詩あり。(杏陰集・卷二)

○九月十八日、南禅寺にて聯句の会に参加する。(羅山詩集・卷七十五)

連衆は他に、最岳元良・林羅山・稲辺春碩(俊長)・小川宗五(俊政)・元八・春海・正玄。

最岳元良は、臨済宗僧侶。以心崇伝の法嗣。『寛永諸家系図伝』の編修にも関わった。

○十月六日、杏庵亭にて詩歌会あり。木下長嘯子・安楽庵策伝・松永貞徳・打它公軌・堀立庵(正英)・之後・今相・策雲ら出席。(拳白集・一一五三番、策伝和尚送答控)

◎十月、後水尾院に召されて、『大学』三綱領について問われ、答える。その弁舌の鮮やかさを院も称賛する。(年譜)

○十月、豊永堅斎が黒谷に塔を建てたのに対して、記を著す。(年譜、杏陰集・卷九)

○十月、菅沼定芳が近江膳所藩主から丹波亀山藩主に転じたことを祝して、詩あり。(年譜、杏陰集・卷五)

○この年、智仁親王・良尚親王に召されて、『大学』を進講する。その後、宴を賜る。(年譜)

寛永十二年(二六三五)乙亥 五十一歳

○正月、歳旦詩歌あり。(杏陰集・卷四、八雲藻)

○正月、脇坂安元の元旦の歌に唱和する。(杏陰集・卷五、八雲藻)

○正月、林羅山が杏庵の歳旦詩に唱和する。(羅山詩集・卷十五)

○三月七日、漢和聯句の会に参加する。(天理図書館蔵本他)『『連歌総目録』』

連衆は他に、最岳元良・大橋龍慶・昌琢・林羅山・林永喜・玄仲・応昌ら。

○八月、義直に従って、江戸から帰る途次、小田原城主稲葉正則のもとに立ち寄る。『十日夜記(帰尾紀行)』を著す。(年譜、杏陰集・卷二十、国会図書館蔵『杏庵紀行』)

○十月、下総栗原藩主成瀬之虎の求めに応じて、『法成寺鐘銘』を著す。(年譜、杏陰集・卷十四)

○十月、飛鳥井雅胤・雅昭が尾張を来訪し、「行幸記」三部を示す。

義直の命により、書写する。(年譜)

寛永十三年(一六三八) 丙子 五十二歳

○春、江戸にあり。(年譜)

○三月二十九日、義直の日光社参に呂従し、尾張を出発。途中、足利学校に寄る。日光に詣で、四月二十三日江戸着。(年譜、杏陰集・卷十、二十一、国会図書館蔵『杏庵紀行』)

紀行『中山日録』(続々群書類従九)成る。賛川宿で蕎麦を食した記事が載るが、これは蕎麦切の初期の文献として貴重という。森銑三「蕎麦と江戸生活」(『森銑三著作集』続編第十三卷、中央公論社、一九九四年)参照。

○六月、『応永記』『万葉註釈』を書写・校訂する。(年譜)

○八月、家光が尾張徳川家に来臨。その際、ご覧に入れた小姓踊は杏庵の作という。森銑三「偉人暦」(『森銑三著作集』続編別巻、中央公論社、一九九五年)、三鬼清一郎『愛知県の歴史』(山川出版社、二〇〇一年)参照。

○八月、先聖殿にて釈菜。詩あり。(杏陰集・卷四)

○十二月、江戸にて朝鮮通信使の権伏らと筆談する。(年譜、杏陰集・卷十)

○この年、江戸にあつて、『朝鮮来朝記』を著す。これに先立って、『朝鮮征伐記』を著し、世に流布した。(年譜)

寛永十四年(一六三七) 丁丑 五十三歳

○正月、脇坂安元の元旦の歌に唱和する。(杏陰集・卷五、八雲藻)

○二月、金森宗朝の求めにより、「宗悟寺鐘銘」を著す。(年譜、杏陰集・卷十四)

○四月二十三日、義直正室春姫、三十五歳にて没。追悼歌文を制作する。

岡本聡「堀杏庵作徳川義直室春姫追悼歌文をめぐる」(近世文学研究、二〇一〇年七月)参照。

○五月、永原重式の求めにより、「永原松雲墓誌銘」を著す。(年譜、杏陰集・卷十五)

○五月、門人の正允が著した『帳中秘集』の書後を著す。(年譜、杏陰集・卷十一)

○七月、堀親昌の求めにより、「堀親良君墓誌銘」を著す。(年譜、杏陰集・卷十五)

堀親昌は、下野烏丸藩主。飛鳥井雅章に和歌を学ぶ。親良は父。○冬、石川丈山と詩の贈答あり。(杏陰集・卷五、新編覆轡続集・卷十三)

○この年、江戸にあつて、子の正英(立庵)と門人たちに『続日本紀』『文徳実録』を書写させ、朱点を施し訓を付して、「拔萃一卷」を作る。(年譜)

寛永十五年(一六三八) 戊寅 五十四歳

○春から夏にかけて江戸にあり。(年譜)

○正月、林羅山が杏庵の歳旦詩に唱和する。(羅山詩集・卷十五)

○二月、脇坂安元の元旦の歌に唱和する。(杏陰集・卷五、八雲藻)

○二月、『焦氏易林』を書写し、朱点を施し、訓を付す。(年譜)

○三月、近衛信尋・尚嗣父子が江戸に到り、江戸本誓寺に滞在した際、拝謁し、歓待を受ける。富士山の漢詩について贈答し、有職について問答あり。(年譜、杏陰集・巻三)

○三月、柳原中納言(業光)・右少弁(資行)が杏庵を仲介として義直に拝謁する。(年譜)

○三月、京都に赴き、九条忠英・二条康道に拝謁し、篤くもてなされる。(年譜)

○夏、石川丈山と黒谷に遊ぶ。(新編覆醬集・巻一)

○秋、浅野長治の求めによつて、「其先世神道碑事」を著す。尾張に帰る。(年譜)

浅野長治は、備後三次藩主。浅野長晟庶子。

○八月十九日、林永喜没。羅山の追悼詩に唱和する。別に追悼詩あり。(杏陰集・巻五)

○八月、七百石の采地を賜る。(年譜)

○九月、平岩元重の求めにに応じて、その著『見義集』の序を著す。

(年譜、杏陰集・巻七)

平岩元重は、三河の人で、義直に仕えた武将。

○九月、道家正休(医師。杏庵門人)の為に「見台銘」を著す。

(年譜、杏陰集・巻十四)

○この年、吉昭が惺窩著『文章達徳録綱領』を校訂して刊行し、父角倉素庵の志を遂げようとした。その序を著す。(年譜、杏陰集・

巻七)

序には「寛永十六年九月」とある(東北大学附属図書館蔵本)ので、翌年の刊行か。

寛永十六年(二六三九)己卯 五十五歳

○この年、近衛尚嗣の歳旦詩に唱和する。(杏陰集・巻三)

○春、尾張にあり。(年譜)

○春、義直自ら能を舞った席で、高巖和尚が詩を詠み、それに唱和する。(杏陰集・巻四)

○春、石川丈山と詩の贈答あり。(杏陰集・巻六、新編覆醬集・巻

二)

○二月、「石川主馬佑(石川丈山のいとおじ石川吉信)墓誌銘」を著す。(年譜、杏陰集・巻十五)

○七月二十三日、冷泉為景が杏庵宛てに書翰を著し、『惺窩文集』の不備を補い、新たに編集したものを刊行したい旨、述べる。(『藤

原為景朝臣詩集』所収「藤原為景朝臣遺文」)

了承したとの返簡あり。(杏陰集・巻十)

冷泉為景は、惺窩の長男。断絶していた下冷泉家を再興した。

菅得庵に学ぶ。

○秋、江戸に赴き、外孫黒川道祐の為に『周易』を講義する。(年譜)

黒川道祐は、医師。安芸藩医黒川寿閑の男。母は、杏庵女。

○十二月二十一日、金地院にて聯句の会に参加する。(羅山詩集・

卷七十五

連衆は他に、最岳元良・林羅山・林恕（鷺峰）・知信・林守勝（読耕斎）・柳瀬良以・黒川寿閑（寿潤）・辻了的（端亭）・坂井伯元・人見卜幽・良雲・道二。

林鷺峰は、羅山三男。詩文集『鷺峰文集』。林読耕斎は、羅山四男。辻端亭は、水戸藩儒。羅山に学ぶ。

○冬、「善照寺鐘銘」を著す。（年譜）

○この年、林羅山が杏庵の求めに応じて題画詩を詠じる。（羅山詩集・卷六十八）

寛永十七年（一六四〇）庚辰 五十六歳

○正月、歳旦詩あり。脇坂安元が唱和する。（杏陰集・卷五、八雲藻）

○正月、脇坂安元の元旦の詩に唱和する。（杏陰集・卷五、八雲藻）

○正月、林羅山が杏庵の歳旦詩に唱和する。（羅山詩集・卷十五）

○正月十五日、杏庵席上、林羅山が詩を詠む。（羅山詩集・卷二十一）

○正月二十一日、林羅山と聯句あり。最岳元良も同座。（羅山詩集・卷七十五）

○四月、近衛尚嗣に『周易』を講義し、「菅織染（菅沼定芳）」に「神書二卷」を講義した。（年譜）

○六月、京都に帰る。教えを乞おうとする人々多数来訪。（年譜）

○八月、近衛信尋が杏庵の邸宅に来臨。尊純法親王、四辻公理・柳

原資行らも訪れる。（年譜、杏陰集・卷二）

○九月七日、石川丈山とともに松永尺五を訪問する。丈山の詩に唱和する。（杏陰集・卷六、新編覆醬集・卷二、尺五集・卷二）

松永尺五は、儒学者。貞徳の子。祖母は惺窩姉。詩文集『尺五先生全集』。

○九月二十四日、尾張に戻る杏庵に対して、近衛尚嗣ならびに石川丈山・松永尺五が詩を贈り、それに唱和する。（年譜、杏陰集・卷六、新編覆醬集・卷二、尺五集・卷二）

○九月、「山城氷室記」を著す。（年譜、杏陰集・卷九）

○九月、都筑吉保が寛永十四年に朝鮮通信使の権伏（菊軒）と贈答した詩を見て、唱和する。（杏陰集・卷六）

○冬、成瀬正房が『群書治要』に訓点を付すことを求めたが、金沢本が官庫にあり見られないため、難しい旨を述べ辞退したものの、正房は承知せず、やむなく付訓した。（年譜、杏陰集・卷十二）

○この年、子の立庵、外孫の黒川道祐らが『万病回春』の薬名について質問したため、『多識篇』を校訂して与えた。（年譜）

『万病回春』は、明の龔廷賢が著した総合的な医学書。『多識篇』は、羅山が『本草綱目』から語を抜粋し、和訓を施した辞書。

寛永十八年（一六四一）辛巳 五十七歳

○この年、江戸にあり。（年譜）

○正月、林羅山が杏庵の歳旦詩に唱和する。（羅山詩集・卷十五）

○二月、「本多親信墓誌銘」を著す。（年譜、杏陰集・卷十五）

○この年、熊谷立設の為に『職原鈔』を講義する。(年譜)

寛永十九年(一六四二) 壬午 五十八歳

○この年、江戸にあり。(年譜)

○正月、林羅山が杏庵の歳旦詩に唱和する。(羅山詩集・卷十五)

○二月、下総関宿藩主北条氏重の為に、「関宿城鐘銘」を著す。(年譜、杏陰集・卷十四)

○三月、幕命により、林羅山らとともに『寛永諸家系図伝』の編纂に携わる。(年譜、寛永諸家系図伝序)

○五月、『続日本紀』を書写させ、朱点を施し、訓を付す。(年譜)

○七月、にわかに咯血し、義直は医師を遣わして治療させる。(年譜)

○十一月二十日、江戸にて病没。(年譜) 墓、江戸芝金地院、京都南禅寺帰雲院。

林羅山に追悼詩あり。(羅山詩集・卷四十)。ほかに、東京大学史料編纂所蔵『杏庵先生追悼詩文集』あり。金地院の墓は、「近き火災に碑銘も損じてしれずといふ」(大田南畝『一話一言』巻八)。

○寛永末頃、石川丈山が杏庵の歳旦詩に対して唱和する。(覆醬集・上)

「医正意が尾陽より示さるる元旦の仕に寄酬す」の尾聯に、杏庵を評して、「仁術 功成りて才芸に富めり／春風 千載の呂純

陽」とある。「呂純陽」は、唐の仙人。

○万治二年六月十九日、『朝鮮征伐記』刊。書肆、二条通鶴屋町田原二左衛門。

【主要参考文献】

小高敏郎『松永貞徳の研究』至文堂、一九五三年。改訂新版、一九八八年、臨川書店

堀勇雄『林羅山』吉川弘文館人物叢書、一九六四年

津田修造・吉田幸一「木下長嘯子年譜」『長嘯子新集』中巻、古典文庫、一九九三年

小川武彦・石島勇『石川丈山年譜』青裳堂書店、一九九四年

市古夏生『近世初期文学と出版文化』若草書房、一九九八年

鈴木健一『林羅山年譜稿』ぺりかん社、一九九九年

川平敏文「先哲叢談聚議―堀杏庵・石川麟洲」(雅俗、二〇〇〇年一月)

岡雅彦他『江戸時代初期出版年表』勉誠出版、二〇一一年

高橋俊和『堀景山伝考』和泉書院、二〇一七年

ENGLISH SUMMARY

A Draft Chronological Record of Hori Kyoan's Career

SUZUKI Ken'ichi

At the start of the early modern period, Confucian scholars who had studied under Fujiwara Seika 藤原惺窩 were the leading figures in the world of Chinese studies. Among them, Hayashi Razan 林羅山 in particular could be said to have been an especially outstanding figure. But it was not only

Razan who stood out. Hori Kyōan 堀杏庵 (1585–1642) was unusual in that he had connections with the authority of the Owari 尾張 branch of the Tokugawa 徳川 family and was also a physician, as well as working in close cooperation with Razan, and he made a major contribution to the thriving state of the world of Chinese studies during this period. For these reasons Kyōan, too, ought to be held in high regard. On the basis of such considerations, in this article I divide Kyōan's career into three periods— (I) pre-service years, (II) service with the Asano 浅野 family, and (III) service with the Owari branch of the Tokugawa family—and summarize his life in the form of a chronological record. Worthy of particular note are his training as a physician in his younger years, his friendship with Razan, and, in period III, his growing fame as a Confucian scholar from around the age of forty when he entered service with the Owari branch of the Tokugawa family.

Key Words: the start of the early modern period, confucian scholars, Hori Kyōan, Hayashi Razan, Owari branch of the Tokugawa